

中国のデジタル・フェミニズムにおける内部分断

ーネットスラング「婚驢」をめぐる言説分析を中心にー

ZHUANG Yutong

2010年代以降の中国フェミニズム運動は、#MeToo運動を経て広範な支持を獲得する一方で、男性中心的な社会構造との妥協を一切拒否し、徹底的な分離を志向するラディカルな潮流を台頭させた。その文脈において生成されたのが、「婚驢(こんりゆ)」というネットスラングである。この用語は、家父長制的な婚姻制度を選択した女性をコミュニティから排除するための境界設定の道具として機能し、深刻な内部分断を引き起こしている。しかし、国内データのみ依存した先行研究では、検閲により不可視化された議論の全体像や、攻撃的言説の背後にある具体的な論理構造は十分に捉えきれていなかった。

本研究の目的は、以下の二点にある。第一に、検閲のない中国国外プラットフォームXのデータを参照点として導入することで、中国国内のウェイボーではすでに不可視化された議論の全体像を再構築し、国家の検閲という政治的文脈が運動の言説にどのような影響を与えているかを明らかにすることである。第二に、マクロな分類に留まらず、「婚驢」という語の使用と批判をめぐる言説を詳細に分析することで、この言葉がフェミニズム内部の亀裂を助長する具体的な論理を解明することである。

分析では、ウェイボーから301件、Xから500件の計801件を抽出し、比較言説分析を行った。その結果、両者の言説構造には決定的な乖離が見出された。ウェイボーでは、検閲への適応として政治的文脈が削ぎ落とされ、サブカルチャー文脈における娯楽的な記号として消費される「脱政治化」の傾向が強く確認された。対照的に、Xの言説空間は極めて同質的かつ攻撃的であり、全体の7割以上が既婚女性を「運動の純粋性を損なう裏切り者」として断罪する急進的な言説で占められていた。

これらの分析から、本研究は以下の結論を導き出した。「婚驢」をめぐる攻撃性は、単なるミンジニーの発露ではなく、権威主義体制下における抵抗の内向化である。現実社会においてフェミニズムの訴えを受け止める制度的回路が欠如し、国家権力への直接的な対抗が困難な状況下で、運動の行き場のないエネルギーが、最も身近な内部の既婚女性へと向けられた結

果、このような歪んだ形での純化が生じたと言える。本研究は、デジタル空間における言葉の暴力を、抑圧的な政治構造が生み出した構造的な歪みとして位置づけた